

# 病の党—コロンタイの小説『偉大なる恋』における レーニン批判

北井 聡子

## 1. 本稿の目的

アレクサンドラ・コロンタイの中編小説『偉大なる恋 Большая любовь』<sup>1</sup> (1923) は、これまでに全く違う2つの解釈がなされてきた。ある研究者は、これを彼女自身の過去の不倫の恋をもとにしたものと考え<sup>2</sup>、また別の研究者は〈レーニン—妻クルプスカヤ—愛人アルマンド〉の三角関係を描いたものだと主張する<sup>3</sup>。確かにここでコロンタイが「女性作家は、自分の体験を自分の言葉で表すべき」と主張していた事実を考慮したなら、自身の体験が題材になっているとする前者の説がより真実味を帯びてくる<sup>4</sup>。しかし他方で、この小説はロシアから亡命した革命家のナターシャと妻子あるセーニャ（セミョーン・セミョーノヴィッチ）の不倫の恋物語であり、舞台は1917年より遥か前のフランスとなっている。この状況はレーニン達の亡命生活と一致するばかりでなく、時期を同じくしてパリに亡命していたコロンタイは、彼らの関係を間近に観察していたに違いない。このように研究者の間では意見が分かれているものの当のクルプスカヤは、小説は自分たちのことを描いたものとみなし、不快感を覚えた可能性があるという。小説発表の直後、党女性部の幹部ヴィノグラツカヤが、雑誌『赤い処女地』に35ページにも渡る激しいコロンタイ批判の論文を発表しているが、後に彼女は回想録で、批判はクルプスカヤの指示により行ったと証言しているのである<sup>5,6</sup>。クルプスカヤの怒りは尤もだろう。なぜなら彼女がモデルと考えられるナターシャの恋敵である妻アニュータは無知で異常に嫉妬深く、夫セーニャの「貴重な時間を奪う」反革命的人物として描かれているのである。

本稿では、上述の両方の説が半分は正しく半分は間違いであること、つまり『偉大なる恋』はコロンタイとレーニンの物語であることを明らかにしたい。とはいっても二人の間にロマンスがあったという意味ではなく、小説は彼女の当時の政治的主張を恋愛物語に変換したものと考えられるのである。1921年にコロンタイは「労働者反対派」という古参のボリシェヴィキが結成した党内分派に属し、同年3月の第十回党大会とその前後の時期にレーニンと激しい政治闘争を行っている。注目したいのは、大会の直前に黨員にばら撒いたコロンタイの論文「労働者反対派（Рабочая оппозиция）」<sup>7</sup> (1921) である。ここに記された主張を詳細な検討に付すれば、小説『偉大なる恋』と内容が符合していること、そしてレーニンの当時の発言が小説の中に織り込まれていることに気付かされるだろう。

またこの小説には様々な「病」が次から次へと現れることにも着目したい。それは登場人

物たちが患う実際の病気の場合もあれば、病のメタファーで表現される出来事の場合もある。まるで世界全体が病に冒されているかのような不安な物語が産出された背景にあるのは、1920年代前半の混乱した社会である。内戦による荒廃、飢饉は、無数の農民暴動を引き起こし、さらに21年のクロンシュタットの反乱は他ならぬ労働者階級自身の蜂起であった。この不安な状況を打開するべく打ち出され、しかし新たな不安を生み出すことになるのが1921年のNEPの開始である。為政者たちは誰一人として、この資本主義経済への回帰を恒久的な措置とはみなさず、ユートピアへの一時的な退却と捉えていたが、E. ナイマンは、ボリシェヴィキ達にとってNEPが「不穏なデニズン」<sup>8</sup>のようなものだったと指摘している。NEPは戦時共産主義時代の荒廃から立ち直る為の必要に迫られた逸脱であり、その合法性が強調されると同時に、常に監視の目を光らせなくてはならない新たなブルジョワであった。

やがてボリシェヴィキは、ユートピアの遅延の要因とみなす様々な不安を「病」（それはユートピアを守る厚い壁をいとも容易く乗り越える）でもって表現する。「病」は勿論、根絶（粛清）されねばならない。では、コロンタイが誰に病のレッテルを付与したのかを追うことで、『偉大なる恋』に隠された批判の意図が見えてくる。

## 2. 女を黙らせる

小説『偉大なる恋』を構成する主要なプロットの一つは、延々と続くヒロイン・ナターシャの軟禁とそれに伴う不安や神経症の発症である。革命の理論家セーニャは論文執筆の為、郊外の街〈Γ〉に赴く。当地には知り合いの「教授」がいて、図書館にある貴重な資料を使わせてくれると約束してくれたのだった。そこに愛人であるナターシャを呼び寄せるのだが、妻アニュータに浮気が露呈することを極端に恐れるセーニャは、ナターシャがホテルの一室から出ることを禁じてしまう。このような次第でナターシャは幽閉されるのだが、まず『偉大なる恋』が単なる恋物語以上の意味をもつことを明らかにするため、女性作家が「幽閉される女」を描く時、それが何を意味するのかを考察しておかねばならない。

19世紀の小説においては、このタイプの登場人物は決して珍しいものではなく、サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーの名著『屋根裏部屋の狂女』（1980）の発表以来、「幽閉される女」達は、家父長制に対する抵抗や女性が受ける抑圧の象徴として読まれるのが定石となっている。数ある作品の中からここではシャーロット・パーキンス・ギルマンの『黄色い壁紙』<sup>9</sup>（1892）を取り上げ、それとの比較を通じてコロンタイの『偉大なる恋』を読み解きたい。以下みていくように、この2作は「ヒロインの幽閉・言葉の喪失・神経症の発生」という類似した構造を有している。欧米の女性作家の作品に常に関心を抱いていたコロンタイが、話題作であった『黄色い壁紙』を知っていた可能性は高いといえるかもしれない。しかし、ここでより重要なのは、ギルマンをコロンタイが実際に読んだか否かではなく、同じ構造を持つ作品が生まれたのは何故か、という問いであり、結論から言えば、二人の作者には共通のトラウマが指摘されるのである。とはいえ、それと同時に、二つの作品には大きな相違点も指摘される。つまりギルマンの主人公が神経症を発症し、物語は狂気うちに終了するのに対

し、コロンタイのヒロインは、そこから直ぐに立ち直り権威者に対する反逆を企てているのである。

『黄色い壁紙』は、軽いヒステリー症の治療の為、内科医の夫の指示により田舎の屋敷の一室に幽閉されたヒロインが、部屋の壁紙の中に女を「発見」し、やがて壁紙を剥がす行為に取り憑かれ、ついには発狂してしまうという物語である。今やこの作品は、アメリカのフェミニズム文学の「古典」としての地位を確立しているが、発表当時は専ら狂気の描写に注目が集まり恐怖小説として読まれていたという。フェミニズム的視点から再評価を受ける契機の一つとなったのが、上述の『屋根裏部屋の狂女』である。著者ギルバートとグーバーは『黄色い壁紙』を評して、「すべての女性作家の『表す言葉を持たぬ哀しみ』を言葉にできるなら語りたいたいと思っていることを語り尽くした典型的な物語」<sup>10</sup>としているように、この物語では「言葉の喪失」が重要な要素となっている<sup>11</sup>。ヒロインは「書く」「考える」といった行為を夫から禁じられ、それでも隠れて日記を綴っている。しかし、徐々に執筆意欲は減退していき、ついに全く書くことができなくなって発狂に至るのである。このように女の狂気は言葉の喪失と引き換えに生じている。

同じプロセスが『偉大なる恋』のナターシャにもみられるのである。ナターシャの言葉の喪失は、浮気の発覚を恐れるセーニャが外部世界との手紙や電話の禁止したことに始まり、さらに彼は自分と交わす会話の「言葉」も奪ってゆく。即ち、

(…) 束の間の会話の時間もなかった。抱擁、キス、お茶を飲みながらの冗談はあったし、夜は愛しあった。だけど会話はなかった。話しをすることは全然なかった。 (66)

ギルマンのヒロインが、徐々に日記を書くことができなくなったように、時間の経過とともに、ナターシャにも論文執筆という「書く」行為に影響が現れてくる。

ナターシャは働こうとしてみた。締め切りまでに論文を仕上げなければならない。しかし仕事はうまく行かず、だらだらと停滞気味だった。今日書いたものは、次の日には気に入らなくなっていた。それは〈苦し紛れに書いたもの〉みたいな気がしたのだった…。 (66)

そして、彼女にも完全な沈黙の時が訪れる。ある時セーニャは、何の連絡もなく教授の家へ出かけたきり、ホテルを3日間も留守にする。深刻な不安に襲われるナターシャの許に彼から手紙が届くのだが、そこには病気になったため暫く帰ることが出来ないと記された上、最後には「覚えてるね、こっちに手紙を書くな、電話もするな」(73)という一文が添えられていた。唯一の対話者であったセーニャの不在、手紙と電話の禁止、これは言葉を完全に失った状態と言えるが、その証拠に以前は「苦し紛れに」ではあったにせよ書くことができた論文

がこの時点で1頁も進展しなくなる。(仕事は完全に止まってしまった。74)そして言葉と引き換えに発症するのは神経症である。神経(нерв)の異常な状態についての言及は、幽閉された当初から既にはじまっているのだが、セーニャの不在時に深刻化し(すべて私の神経のせいだ…71)、ついに再会の場面で彼を驚愕させる「は!は!は!」という狂気の笑い声となるのである。(可哀想に。すっかり神経をやられてしまったのだ。79)

ここまで『黄色い壁紙』と『偉大なる恋』の構造的な類似点、即ち「幽閉・言葉の喪失・神経症の発症」を確認してきた訳だが、作品の内容そのものと共に我々にとって重要なのは、小説を書かせた二人の作者の現実の体験である。ギルマンの方は作品解説「どうして私は『黄色い壁紙』を書いたのか」(1913)や自伝の中で、明確に執筆の動機を明らかにしている。それによれば、彼女は子供を産んだのち産後ノイローゼになったために、アメリカの神経症における最高権威であるウィア・ミッチェル医師から悪名高い「安静療法」と呼ばれる治療を受けることになる。しかし「知的な生活は一日2時間だけ、生涯二度とペン、絵筆、鉛筆を手にしてはならない」<sup>12</sup>という医師の指示は、謂わば「女を家庭に閉じ込め、黙らせる」ことを目的としたもので、結果、作家である彼女は狂人になる寸前にまで追い込まれてしまったという。この体験を物語に昇華させたのが『黄色い壁紙』であり、彼女は「医師から受けた治療が誤りだったことを説得する為」に書いたと証言している<sup>13</sup>。

ではコロンタイはどうだろうか。彼女自身は、小説『偉大なる恋』の執筆の目的について言及したことはない。しかしこの作品を記す直前の1921-22年の彼女の政治的な活動を振り返ったならば、ギルマンと同じく権威者から病の「診断」をされ、沈黙を強いられたトラウマが確認されるだろう。そして、このことは、これまで恋物語としてのみ読まれてきた『偉大なる恋』の隠された批判の意図を浮き彫りにすることになる。

1921年3月の第十回党大会は、戦時共産主義からNEPへ移行した点において歴史的に重要な大会として記憶されているが、実際にはNEPの決定は大会終盤に簡単に宣言されたのみで、圧倒的に多くの時間が割かれたのは、コロンタイが属した党内分派「労働者反対派」との論争であった。そもそも労働者反対派とレーニンの対立は、内戦終結後の1920年末以降に激化した労働組合のあり方を巡る党全体を巻き込んだ議論の中で顕現化したものである。論争には複数の派閥が存在したが、その構図を非常に単純化して述べると、①労働組合を「共産主義の学校」と位置づけるレーニン、②労働組合の「軍隊化」を求めるトロツキー、③シリャープニコフを中心とする労働者反対派(コロンタイは後に参加)、そして④各派閥の中間的な立場を取るブハーリンの対立であった<sup>14</sup>。労働者反対派は、労働者の間に蔓延していた不満を吸収し、一層勢力を強めていた。彼らの主張は、生産管理における労働組合による統制、党内の官僚主義に対する批判、言論と批判の自由、選挙制の復活といった民主化の要求であり、これらを今後レーニンは「サンディカリズム的偏向」として糾弾することになる。既に一連の論争に関しては、膨大な研究史が存在するが、ここでは従来の研究とは視点を変えて、レーニンが「何を語ったか」よりも「どのように語ったか」に着目したい。そこではまず取り上げたいのは、「労働者反対派＝サンディカリズム」との構図を彼が初めて

打ち出した 1921 年 1 月 21 日付けの新聞『プラヴダ』の論文「党の危機 Кризис партии」である。少し長くなるがレーニンの冒頭の語りに注目してみよう。

小さな意見の相違がサンディカリズムになってしまった。党が十分に健康で強力になって、病気から急速に根本的に回復しなければ、サンディカリズムは、共産主義との完全な絶縁、党の避けがたい分裂を意味する。

苦い現実を直視する勇気をもたなければならない。党は病気である。党は熱病にかかって震えている。すべての問題は、病気になっているのは「熱病に罹った上層部」だけなのか、あるいは、もしかするとモスクワの上層部だけなのか、それとも全身の器官が病気にかかっているのか、ということである。後者の場合だとすれば、この肉体は数週間で（党大会までに、そして党大会の席上で）完全に回復し、病気の再発を不可能にすることができるのか、それとも病気は長引いて危険になるであろうか、ということが問題である。<sup>15</sup>（下線筆者）

引用部で強い印象を与えずにおかないのは、何度も繰り返される「病」に関する単語ではないだろうか。この論文は結論部においても、サンディカリズムは病であり、完全な回復（*вылечиться от него окончательно*）の必要が宣言されている。即ち、レーニンは労働者反対派を「病のレトリック」でもって批判するのである。このやり方はその後も継続され、約一月半後に開催された党大会で反対派は、再び「病気のグループ *больная группа*」<sup>16</sup>や「一部の労働者に感染しつつある病気 *это – болезнь, затрагивающая часть рабочих*」<sup>17</sup>と呼ばれ、感情的な厳しい批判にさらされることになる<sup>18</sup>。

レーニンが強い批判を展開したのは、冒頭でも触れたこの時期の国内の危機的状況があったの事だった。内戦後の荒廃からの立て直しは一刻の猶予もならず、民衆の不満はボグロムや農民暴動を拡大させ、そして大会の直前には、かつて「革命の栄光」とまで呼ばれたクロンシュタットの水兵・労働者の反乱が起きたことで、第十回党大会はすさまじい不安感の中で開催されたという。レーニンはこの困難な局面を乗り切るために、党内の一致を乱す要素を叩き潰す意思に突き動かされていた。

「その時ほどレーニンが怒った姿を私はみたことがない。」<sup>19</sup>これは大会に出席していたアンジェリカ・バラバーノフの言葉であるが、レーニンを激昂させる直接のきっかけとなったのは、まさに党大会の会場で彼の手に渡されたコロンタイの論文「労働者反対派」であった。バラバーノフはその瞬間のレーニンの様子を克明に記録している。

彼は、アレクサンドラ・コロンタイが話をしていた相手のところに近づいて行き、憤慨して次のように言った。「何をしているのだ？ あなたは、まだこの人間と口を利いているのか!？」彼は会場に入り、そして周囲の状況、直接言われた挨拶や、話しかけられたことにさえ気づかない程に冊子を読むことに没頭していた。読んで

いるうちに、彼の顔はみるみる陰しくなっていた。<sup>20</sup>

大会の期間中、レーニンのコロンタイの論文を「この集団によってなされてきた腐敗の総括  
итог (...) произведенного ею разложения。」<sup>21</sup>と呼ぶなど言葉を尽くして批判し、さらにこの場  
に何の関係もない彼女の私生活についてまであげつらい攻撃したという<sup>22</sup>。大会の最後には、  
「労働者反対派」を異端と決めつける「アナルコ・サンディカリズム的偏向」に関する決議  
が採択され、かくして分派活動は全面的に禁止されることになる。その後6月のコミンテルン  
第三回大会で、コロンタイは党内の規定を破り再び「反対派として」発言するも、完膚なき  
までに叩きのめされるのである。そしてこれを期に彼女と労働者反対派のメンバーは国内での  
政治的地位を次々に失ってゆくことになる。

さてここで注目したいのは、論文「労働者反対派」の行方である。コロンタイは、コミン  
テルンの大会期間中に出席者の一人、ドイツ共産党員のライヘンバッハに論文の一部を手渡  
し、保管するよう依頼している。それは自分の政治的地位が非常に危うい状況にある事を認  
識し、せめて主張を守りたいというコロンタイの思いの表れであった。しかし彼女はスピーチ  
を行った数日後、態度を一変させライヘンバッハに原稿の返却を求めている<sup>23</sup>。この時点で  
既に原稿はベルリンに発送されてしまっていたが、恐らく論文が掲載される予定となっていた  
新聞『ゲルマニア』の編集部宛の手紙に彼女は次のように書くのである。

コミンテルンのメンバーとして、コミンテルンの範囲を超えたインターナショナルの  
分派活動は、如何なるものであれプロレタリアートにとって有害であり、また第三イ  
ンターナショナルの歴史的課題を困難にするものである。故に、直ちに「労働者  
反対派」の印刷を中止するよう要請する。<sup>24</sup>（下線筆者）

この手紙に確認されるのは、権威者レーニンから主張を抑えこまれ、沈黙することを選んだ  
コロンタイの姿であり、今後公には批判的発言をした形跡は全くない<sup>25</sup>。しかし次の項目で  
みていくように、彼女はフィクションの世界の「幽閉されるヒロイン」に抵抗の継続を託すので  
ある。

### 3. 小説『偉大なる恋』と論文「労働者反対派」

ここからは小説『偉大なる恋』と論文「労働者反対派」が同じ内容であることを証明する  
ため、2作の照合作業に入りたいと思うが、両著作の執筆時期には約1年の隔たりがあり、  
その間に行われた第十回党大会とNEPの開始が、新たな要素として小説に取り込まれること  
になる。

本稿の冒頭でも述べたように、NEPは資本主義への回帰であり、ボリシェヴィキ達はこれを  
恒久的な措置とはみなしていなかった。この言わば「我々が本来いるべき場所ではない」と  
いう感覚は、ナターシャとセーニャが郊外の街〈Γ〉のホテルに逗留している状況に反映され、

また現実世界に起こっていた経済危機は、セーニャの慢性的な資金難として描かれている。

次に登場人物について検討してみたい。まずはナターシャである。『偉大なる恋』がコロンタイとレーニンの物語である、というのが本稿の仮説であった。ならばナターシャのモデルはコロンタイかと問われれば、話はそれ程単純ではない。つまり指導者レーニンから排斥されたのは彼女一人ではなく分派集団全員であったことを考えた時、ヒロイン・ナターシャは労働者反対派という「集団の人格化」であるといえるのだ。また労働者反対派〈Рабочая оппозиция〉に、ナターシャという女性の人格が与えられたのは何故だろうか。その根拠として真っ先に思いつくのは、それが女性名詞であり、党大会中レーニンから〈она〉と呼ばれ批判されていたことがあげられる。しかしこのことよりも興味深いのは、コロンタイが定義するプロレタリア階級と労働者反対派の関係性である。コロンタイは次のように言う。

«рабочая оппозиция, - это прежде всего пролетарии, связанные со станком или шахтой, плоть от плоти рабочего класса.» (5)

労働者反対派とは、何よりも機械と鉱山と結びついたプロレタリアートであり、労働者階級の血肉を分けた存在である。

ここで注目したいのは、〈плоть от плоти рабочего класса〉という表現である。これは旧約聖書の創世記（第2章23節）からの引用、つまり

И сказал человек: вот, это кость от костей моих, и плоть от плоти моей; она будет называться женою, ибо взята от мужа»

人は言った。「これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これを女と呼ぼう。

まさに、男から取られたものだから。」

であるのだ。このことから、労働者反対派がプロレタリアートという集団的「アダム」から生まれた「イヴ」としての位置づけを帯びてくるのである<sup>26</sup>。

続いて取り上げるのはセーニャである。セーニャがレーニンと想定されることについては、既に述べてきたが、彼らの間にある重要な共通点を知ることによって、我々はその確信を一層強めることになる。それは鉄の意志を持つ政治的天才であったレーニンからは想像しがたい彼の性格的な弱さ、強迫観念である。エリツィンの軍事顧問を務めたヴォルコゴノフは極秘文書として長らく保管されていた資料を元に、レーニンの斯様な精神の病的傾向を明らかにしている。それによれば1900年にはシュツットガルトで神経科医の診察を受けた記録があり、かなり若い時から症状に悩まされていたと推測され、また革命の年1917年の2月には妹のマリアへ手紙で「どうしようもなく、いらいらして仕事は全く手につかない」<sup>27</sup>と不安を吐露している。そして1921年から絶命するまでの数年間には自殺願望を伴うほどに症状は悪化し、かの有名なオシポフを含む複数の精神科医の診察を受けていたという<sup>28,29</sup>。物語に目を移すと、

レーニン同様に絶えず強迫観念に囚われるセーニャをナターシャは「マニア」という精神医学の用語を使い、「躁病者のようだ Его страх...граничил с манией」(54)とか「セーニャの被害妄想 мания преследования Сени」(50)と表現している。

さらに二人の重要な登場人物、妻アニュータと一度も姿を見せることのない「教授」と呼ばれる女性に話を進めよう。二人の謎解きの答えは、論文「労働者反対派」に見出すことができる。コロンタイによれば、現在党は労働組合のあり方を巡って諸派閥に別れ対立しているが、「誰が共産主義経済を建設するのか」という根本的な問いにおいては、「労働者反対派」のみが、労働者階級を唯一の「創造主」とする原則に立っているのに対し、それ以外の上層部は3つの異質な社会集団①労働者 ②農民 ③実務家 (делец)・専門家 (специалист) のすべての要求に応えようとする「階級を超えた政治」<sup>30</sup>を行っているとは批判する。<sup>31</sup>

つまりアニュータは農民、教授は「実務家」や「専門家」と呼ばれる知識階層の人格化だと考えられるのである。まず農民は、それが「小所有者の悪癖を持つ」<sup>32</sup> からで、基本的にプチ・ブルジョワジーと同一視されている。よってその要求に答えることは、「ソビエト政治を様々な方向へと引きずり回し、その階級的な厳密さを歪めてしまう」<sup>33</sup>。そして知識階層はより深刻な脅威として捉えられている。まず彼らが共産主義の建設者となりえないことは次のように説明される。

資本主義産業を組織していた「実務家」、技術者、専門家が、資本に奉仕してきた全期間に、彼らの中に培われ、有機的に刻み込まれてきた、労働の通常の受け取り方や、見方や、扱い方の範囲を突如飛び越えることが出来て、そして新しい経済の共産主義的形態を作り始めると想定することは(…)個別の天才的人々ではなく、**階級の要請が**、経済のシステムを変えるという真実の忘却を意味するのである<sup>34</sup>。(強調コロンタイ)

共産主義とは全く新しいシステムである為、過去の知識や経験は前の時代にいかに優れていたとしても使用できないばかりではなく、その影響は徹底的に排除されるべき「汚染」と認識されているのである。しかし党の上層部は、経済危機から立ち直るために彼らにますます信頼を置くようになっており、これに対してコロンタイは危機感を抱くのである。<sup>35</sup>そして彼女が恐れる異分子による汚染の恐怖は、「党の粛清 Очистка партии」の必要性の主張となって現れる。

労働者反対派が、断固として主張する第二の条件は、党から非プロレタリア分子を粛清することである。ソビエト権力が強大になればなる程、一層多くの党の他者である農民、俗物、そして時に明確な敵意を示す分子たちが近寄ってくる。粛清は徹底的に行われなくてはならない<sup>36</sup>。

小説の中でこのような知識階級の党への侵入の恐怖は、ナターシャの地位を「教授」が奪っていく過程として描かれている。ナターシャはかつてセーニャと革命理論を戦わす同志であった。しかし彼は「教授」と出会った時から、「ついに対話者を見つけた」（58）と歓喜し、以後教授の家に入り浸りナターシャを蔑ろにしていけるのである。

アニュータが農民であると想定するなら、この反革命的な баба とセーニャとの結婚が象徴する意味も見えてくる。彼は、アニュータと「憐れみ」から結婚し、しかし「彼女のそばで何時も他人として、孤独に暮らしている」（28）と嘆く。これは NEP の状況そのものだ。NEP は、そもそも穀物徴収の制度を強制的な割当挑発から現物税に替えることより開始されたもので、端的に言って「農民の為」の施策であった。第十回党大会中レーニンは、ロシアの共産主義革命を救うには疲弊した農民の不満を抑え、生産意欲を向上させる必要があり、それには「プロレタリアートと農民が協定し（соглашение с крестьянством）」、「中農を満足させなくてはならない（удовлетворить среднее крестьянство）」と繰り返す。つまり二人の結婚は、レーニンが言うところの「農民との協定」を暗に示唆している。そして農民の疲弊した状況は「病」の形で現れる。早くも小説の導入部でセーニャは「医師からアニュータが心臓病であることを告げられた。彼女を苦しめることはできない」（19）と訴え、その後も妻と息子は発熱、はしか等の病に次々に罹患し、さらに日常的に服毒自殺を試みてセーニャの気持ちを引き留める。迫りくる半死半生の妻に怯えるセーニャは何度も「アニュータの為だ（ради Анюты）」と言い、理不尽な軟禁行為を理解するようにナターシャを説得するのである。

このように純粋な階級支配を脅かす〈実務家／専門家〉と〈農民〉は、小説の中では女の姿となりセーニャに対する影響力を強めていく。さらに、この二人にナターシャを加えた3人の女の誰かが、自分の監視の目を逃れて勝手に動き出すのではないかと怯えるセーニャは、ホテルと教授の家を気が狂ったように往復する。そしてセーニャの底なしの強迫観念が行き着く先は、ナターシャの「追放」だ。彼は不安の原因は、あろうことかナターシャの存在であると主張し（ならば本来の活動の場へと戻りたいという彼女の望みを封じた上で）ホテルから彼女を X という別の街に追い出してしまう。この場面が想起させるのは、第十回党大会で労働者反対派を党から追放したレーニンをおいて他にないだろう。

しかし物語はここで終わりではない。ナターシャがたどり着いた街〈X〉で、彼らは再会する。そしてアニュータや教授の侵入の不安から解放された二人には束の間の和解の時が訪れるのだが、ナターシャの気持ちは戻ることはなく愛は終わりを迎え、セーニャを残して列車で本来の革命の前線へと戻っていくのである。さらに言葉を奪われたナターシャに神経症の兆候が表れたことは既に述べたが、実は彼女はすぐに回復し、それと同時に本当に精神病を患っているのはセーニャの方であることが、彼自身の口から告げられるのである。（…医者が言うには、どうやらこの病気はみんな神経性のものらしい…врач сказал, будто вся эта болезнь на нервной почве<sup>79/</sup> すべて僕の神経衰弱症が悪いのだ Вся моя нервнось виновата. 88）かつて労働者反対派がレーニンから「病」の刻印を押され、異端として排斥されたことを想起するならば、このセーニャの精神病が意味するのは、レーニンこそが異端であるというコロンタ

イの決別の宣言だと言えるのではないだろうか。

#### 4. まとめ

本稿では、中編小説『偉大なる恋』の内容と、第10回党大会を前後する時期にレーニンとコロンタイの間で戦わされた政治的な言説を比較し、この小説に隠されたレーニンと党の上層部を批判するメッセージを明らかにしてきた。しかし最後に疑問として残るのは、小説のタイトル「偉大なる恋」の意味ではないだろうか。これは、やはりレーニンとボリシェヴィキへの「愛」であったと考えられる。当時、党の上層部との政治的な路線の違いは決定的なものとなり、彼らとの決別が抜き差しならぬ状況に陥ったとはいえ、それでも同志として行動を共にしてきたレーニンたちとの別れは、コロンタイにとって身体の一部を失うような苦痛を伴うものであったに違いない。そのことは1921年の当大会直前に書かれた論文「労働者反対派」の最後には、「イリイチは、これからも我々と共にあるだろう」という希望の言葉が記されていることや、また小説においても、セーニャと関係を断ちきれず、行きつ戻りつする心情が描かれていることに現れている。しかし最終的には、レーニンが自分たちに与えた「病」のレッテルを投げ返すことで、痛烈な批判を行ったことは既に述べたとおりである。

ところで、1923年には、実はもう一つ未発表の中編小説『父は消息を断った (отец без вести пропал)』が存在する。この小説は未完ではあるものの、その内容は非常に示唆的である。小説のヒロインは5人の子持ちの女性、生活はそもそも苦しいものであったが、そこに夫が突然失踪してしまうのである。大きな不安の中に突き落とされるヒロインであったが、徐々に女性たちと協力して、自立した道を歩んでいく姿が描かれている。まるで父＝「権力者」がいなくなった後の世界の誕生を予感させるものとなっているのだが、この考察についてはまた別稿に期したい。

## 注

1. この小説は、初めコロンタイの旧姓ドモントヴィチの名で発表されている。Домонтович А. Большая любовь // Женщина на переломе (Психологические этюды). М. 1923. С.19-96. 尚、『偉大なる恋』の引用ページ数は、本文中に記す。
2. Barbara Clements. *Bolshevik Feminist: The life of Aleksandra Kollontai*. (London: Indiana University Press, 1979), p. 229. クレメンツは、コロンタイのバリ亡命中の愛人マスロフとの関係を描いたものとしている。
3. Cathy Porter. *Alexandra Kollontai: The Lonely Struggle of the Woman Who Defied Lenin*. (New York: The Dial Press, 1980), pp. 420-421.
4. 「(…) 今後女性作家が「自分の言葉」で自分自身、つまり「女性」について語りだすようになれば、彼女たちの作品は、たとえそれが芸術作品としての外面上美しさを欠いていたとしても、それ自身の特別な価値と特別な意味を有している。」 Коллонтай, А. Новая женщина. // Новая мораль и рабочий класс. М., 1919. С.17.
5. Виноградская П. Вопросы морали пола, быта и тов. Коллонтай. // Красная новь. 1923. №6. С.179-214.
6. Виноградская П. Сердце, отданное народу: К столетию со дня рождения Н. К. Крупской // Новый мир. 1969. №2. С. 193.
7. Коллонтай А. Рабочая оппозиция. М., 1921.
8. Eric Naiman. *Sex in Public: The Incarnation of Early Soviet Ideology*. (New Jersey: Princeton University Press, 1997), p. 9.
9. Т. Ханмерの定義によると「デニズン」とは「合法的な永住者の資格を有する外国籍市民の人々」。
10. Thomas Hammer. *Democracy and the Nation State: Aliens, Denizens, and Citizens in a World of International Migration* (Aldershot: Brookfield, Vt., 1990), p.15.
11. Chartotte Perkins Gilman. *The Yellow Wallpaper* (New York: Dover Publications, 1997) 引用は本文にページ数を示す。
12. サンドラ・ギルバート、スーザン・グーバー著（山田晴子・藺田美和子訳）『屋根裏の狂女—ブロンテと共に—』（朝日出版社、1986年）、126頁。
13. 『黄色い壁紙』が、1892年の発表から近年に至るまで、どのように読まれてきたかについては、次の文献に詳しい。篠目清美「フェミニスト批評のもたらしたもの :The Yellow Wallpaper の場合」『東京学芸大学紀要』No.45、1994年、99-109頁。
14. Chalotte Perkins Gilman, “Why I wrote The Yellow Wallpaper”. *The Forerunner*, October, 1913. (<http://www.nlm.nih.gov/literatureofprescription/exhibitionAssets/digitalDocs/WhyIWroteYellowWallPaper.pdf> で公開)
15. Chalotte Perkins Gilman, *The Living of Charlotte Perkins Gilman: An Autobiography*. (Madison: Univ of Wisconsin Press, 1991.) p.113.
16. Коллонтай. Рабочая оппозиция. С. 21-37.
17. その他、小さなグループも入れると6つの派閥が存在した。
18. Ленин В. И. Кризис партии // Полное собрание сочинений. Издание пятое. Том42. М., 1970. С.234.
19. Ленин В. И. Заключительное слово по отчету ЦК РКП(б) 9 Марта // Полное собрание сочинений. Издание пятое. Том43. М., 1970. С.39.
20. Ленин В. И. Заключительное слово по отчету ЦК РКП(б) 9 Марта. С.38.

18. 勿論、病の言葉で、政治的な敵対者を批判するのは、レーニンの常套手段であったといえる。例えば、1920年の『共産主義の左翼小児病（Детская болезнь “левизны” в коммунизме）』など。
19. アンジェリカ・バラバーノフ（久保英雄訳）『わが反逆の生涯：インターナショナルの死と再生』（風媒社、1970）、249頁。
20. Angelica Balabanoff. *Impression of Lenin*. (trans. by Isotta Cesari. The University of Michigan Press. 1964), pp. 97-98.
21. Ленин В. И. Заключительное слово по отчету ЦК РКП(б) 9 Марта С.39
22. バラバーノフ『わが反逆の生涯』、249頁。
23. Bernhard Reichenbach. Moscow 1921: Meeting in the Kremlin. *Survey* (Oct 1964), pp.16-22.
24. РГАСПИ. фонд 134. опись 3. дело 38.
25. コロンタイの出版中止の要請はあったもののドイツ語訳は出版されている。
26. «Плоть от плоти» が聖書由来の表現であることは В Серов. Энциклопедический словарь крылатых слов и выражений. М.: . 2003. 等を参照のこと
27. ドミートリー・ヴォルコゴノフ（白須英子訳）『レーニンの秘密 下』（NHK 出版、1995年）259頁
28. ヴォルコゴノフ『レーニンの秘密 下』257-274頁。
29. 精神科医ニコライ・オシポフは、スイスで精神医学を学んだ後、ロシアに本格的なフロイト理論を導入した。オシポフについては、Martin Miller, *Freud and the Bolsheviks*. (New Haven: Yale University Press, 1998) に詳しい。
30. Коллонтай. Рабочая оппозиция. С.15.
31. Коллонтай. Рабочая оппозиция. С.21.
32. Коллонтай. Рабочая оппозиция. С.11.
33. Коллонтай. Рабочая оппозиция. С.12.
34. Коллонтай. Рабочая оппозиция. С.22.
35. 恐らく前年度の第九回党大会で革命前の知識階層、所謂「ブルジョワ専門家」を要職へ登用を認めたことが、影響していると思われる
36. Коллонтай. Рабочая оппозиция. С.41.

# **«Больная партия»: Критика Ленина в повести «Большая любовь» Александры Коллонтай**

**Сатоко Китаи**

К настоящему моменту в научной литературе повесть А. Коллонтай «Большая любовь» (1923) трактовалась в двух ракурсах. С одной стороны, как автобиографическая история о любви автора к женатому мужчине Маслову, а с другой - как история любовного треугольника между В. Лениным, Н. Крупской и И. Арманд. В данном исследовании выдвигается гипотеза, что помимо вышеуказанных трактовок, содержание повести можно рассматривать еще и как историю ее отношений с В. Лениным. Вместе с тем, эти отношения не рассматриваются через призму любовных отношений, а политические воззрения А. Коллонтай не имеют какой либо связи с областью чувственных отношений.

В исследовании отмечается такое важное событие в биографическом тайминге А. Коллонтай как конфликт ее взглядов с воззрениями В. Ленина по поводу вопроса будущего устройства социалистического общества. В 1921 году она участвует в антипартийной фракционной группе Рабочая оппозиция, которая резко критиковала бюрократизм партии и требовала дать пролетариату возможность более гибкого самоуправления посредством учреждения широкой сети профсоюзов по всей стране. На X съезде РКП(б) Рабочая оппозиция подверглась резкой критике со стороны В. Ленина, который обозначил ее деятельность как «анархо-синдикалистский уклон» в партии большевиков.

В данной работе проводится сравнительный анализ двух текстов под авторством А. Коллонтай: повесть «Большая любовь» и политическая брошюра «Рабочая оппозиция». Не смотря на то, что стилистика обоих произведений отлична друг от друга, в ходе проведенного исследования было найдено много общих моментов в их содержании. Например, героиня повести Наташа олицетворяет группу Рабочей оппозиции, в то время как ее любовник Семен - самого В. Ленина. В ходе анализа было также обнаружено, что на X съезде В. Ленин критикуя Рабочую оппозицию, обозначал её как «болезнь», при этом в повести А. Коллонтай наблюдается обратная ситуация, когда в конце истории сам Семен заболевает тяжелым недугом - неврозом. Таким образом, в работах А. Коллонтай в завуалированной форме обнаруживается критика В. Ленина, а сложности их взаимоотношений и риторику взаимной критики 1920-х годов можно рассматривать как «больную партию» двух мыслителей и революционных деятелей своего времени.